

玉沢地区条里跡

第6次発掘調査報告

—病院建設に伴う発掘調査報告書—

2003. 3

大分市教育委員会

玉沢地区条里跡

第6次発掘調査報告

—病院建設に伴う発掘調査報告書—



2003. 3

大分市教育委員会

序 文

本書は、大分市教育委員会が平成14年度に永富整形外科病院建設に伴って実施しました玉沢地区条理跡第6次調査の報告を収録したものです。

大分市は、「心かよい 緑あふれる 躍動都市」を都市像に掲げ、文化・歴史的風土を活かした個性豊かな都市の創造に向け、県都として、さらに中核都市としての風格を備えた魅力あふれるまちづくりを推進しているところであります。

本市教育委員会におきましても、文化財の調査・保護・活用など各種事業への取り組みを図る中、その実現に向けて努力いたしているところでございます。

さて、本調査区は病院建設予定地の内、確認調査によって遺構が検出された西側部分にあたり、隣接する周辺部の調査から弥生時代～中世にかけての水田遺構とその広がりが見えていたところであります。調査の結果、弥生時代～古墳時代後期の水路跡を中心とする水田跡を確認することができ、当該期の水稲農業技術や玉沢地区の開発の歴史を紐解く貴重な成果を得ることができました。

この報告書が、広く市民の皆様にご利用され、また、今後の学術研究など幅広く活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、多大なるご配慮・ご協力を賜りました永富整形外科病院長永富整彦様をはじめ、関係されました諸機関の皆様方には衷心よりお礼申し上げます。

平成15年3月31日

大分市教育委員会

教育長 泰 政 博

例 言

1. 本報告書は、大分市教育委員会が永富整形外科病院の委託を受けて実施した、大分市大字玉沢に所在する遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
 2. 発掘調査は、永富整形外科病院の建設に伴い、平成14年8月6日より9月20日にかけて実施した。
 3. 遺構の実測は荻（大分市教育委員会文化財課嘱託）・松竹（同）・水町（同）が、写真撮影は荻が、国土座標測量は高畠豊（大分市教育委員会文化財課技師）・梅田昭宏（大分市教育委員会文化財課嘱託）が行った。
 4. 遺物の整理は井口あけみ（大分市教育委員会文化財課嘱託）が、石器の実測・写真図版作成は荻が、土器の実測は松竹が、木器の実測は松尾（大分市教育委員会文化財課嘱託）が、下図作成は荻・水町が行い、トレース・製図は雅企画に委託した。
 5. 遺物の写真撮影は高畠が行った。
 6. 本書の執筆は、調査を担当した荻・松竹・水町がこれに当り、一部塔鼻（大分市教育委員会文化財課専門員）及び松尾に依頼した。執筆分担は次の通りである。
- | | | |
|----------------|-------|-------|
| 第1章 | | 塔鼻 光司 |
| 第2章・第3章Ⅱ節2・第Ⅲ節 | | 荻 幸二 |
| 第3章第Ⅰ節 | | 水町 裕子 |
| 第3章第Ⅱ節1 | | 松竹 智之 |
| 第3章第Ⅱ節3 | | 松尾 聡 |
7. 遺物番号は本文・挿図・図版で一致する。
 8. 遺構番号は、現場でつけたS番を踏襲して、整理の段階で遺構種名を冠したため、遺構種ことの通し番号にはなっていない。
 9. 挿図における遺構の略号は、次の内容を意味する。 SD＝溝状遺構 S＝水田遺構
 10. 本書の編集は、荻・井口が行った。

本文目次

序文

例言

第1章 はじめに	1
Ⅰ. 調査に至る経過	1
Ⅱ. 調査期間	1
Ⅲ. 調査組織	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
Ⅰ. 地理的環境	2
Ⅱ. 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	5
Ⅰ 遺構 (第4図)	5
1. 溝状遺構	5
第2号溝状遺構 (第5図)	5
第4・7号溝状遺構 (第6図)	5
第5号溝状遺構 (第7図)	5
第8・9号溝状遺構 (第8図)	7
第10号溝状遺構 (第9図)	7
第12号溝状遺構 (第10図)	7
第13号溝状遺構 (第11図)	9
第14号溝状遺構 (第12図)	9
第15号溝状遺構 (第13図)	13
第16号溝状遺構 (第14図)	13
2. 水田遺構	16
第3号水田遺構 (第15図)	16
Ⅱ 遺物	16
1. 土器 (第16図)	16
2. 石器 (第17・18・19図)	18
3. 木製品 (第20図)	22
Ⅲ 各時期の水田層の復原の予察	24
1. 現代・近世の水田層 (第21・22図)	24
2. 古墳時代の水田層 (第21・22図)	24
3. 弥生後期中葉～末葉の水田層 (第21・22図)	27
4. 弥生中期前葉～後期前葉の水田層 (第21・22図)	28
5. 小結	28

挿 図 目 次

第1図 玉沢地区条里跡遺跡群の位置①	2	第12図 第14号溝状遺構平面・断面図	15
第2図 玉沢地区条里跡遺跡群の位置②	2	第13図 第15号溝状遺構平面・断面図	16
第3図 周辺遺跡分布図	3	第14図 第16号溝状遺構平面・断面図	17
第4図 遺構配置図	6	第15図 第3号水田遺構平面・断面図	17
第5図 第2号溝状遺構平面・断面図	7	第16図 出土遺物実測図	19
第6図 第4・7号溝状遺構平面・断面図	8	第17図 出土石器実測図1	20
第7図 第5号溝状遺構平面・断面図	9	第18図 出土石器実測図2	21
第8図 第8・9号溝状遺構平面・断面図	10	第19図 出土石器実測図3	22
第9図 第12号溝状遺構平面・断面図	11	第20図 出土木製品実測図	23
第10図 第10号溝状遺構平面・断面図	13	第21図 調査区南・東・北壁土層断面図及び断面位置図	25
第11図 第13号溝状遺構平面・断面図	14	第22図 調査区西壁土層断面図	26

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧	3	第3表 木製品観察表	29
第2表 土器観察表	29	第4表 石器観察表	30

写真図版目次

図版1	31	図版4	34
1. 第2号溝状遺構東壁a-a'		1. 第13号溝状遺構2出土状況	
2. 第2号溝状遺構b'-b		2. 第14号溝状遺構b-b'	
3. 第2号溝状遺構西壁c'-c		3. 第14号溝状遺構c-c'	
4. 第4号溝状遺構獣骨出土状況		4. 第14号溝状遺構d-d'	
5. 第4・7号溝状遺構東壁		5. 第15号溝状遺構a-a'	
6. 第4・7号溝状遺構a'-a		6. 第15号溝状遺構b-b'	
図版2	32	図版5	35
1. 第5号溝状遺構a'-a		1. 調査区全景1北側	
2. 第8号溝状遺構a-a'		2. 調査区全景2中央	
3. 第9号溝状遺構b-b'		図版6	35
4. 第10号溝状遺構a-a'		1. 調査区全景3南側	
5. 第12号溝状遺構A a-a'		2. 玉沢地区条里跡第6次出土土器	
6. 第12号溝状遺構B a-a'		図版7	37
図版3	33	1. 玉沢地区条里跡第6次出土石器	
1. 第12号溝状遺構b-b'		図版8	38
2. 第12号溝状遺構c-c'		1. 玉沢地区条里跡第6次出土木製品	
3. 第12号溝状遺構d-d'			
4. 第13号溝状遺構a-a'			
5. 第13号溝状遺構b-b'			
6. 第13号溝状遺構c-c'			

第2章 遺跡の立地と環境

I. 地理的環境

本遺跡は、九州島の北東部に位置する大分県の中央部、別府湾を北に臨む大分市の大分川の下流に広がる大分平野の南西部の大分市玉沢に所在する。南から西にかけてを霊山から延びる丘陵に、北部を雄城台を中心とする独立台地に囲まれており、大分川支流の七瀬川流域に形成された沖積低地に立地する。細かくは、七瀬川の屈曲部と北側から張り出す雄城台、そしてすぐ下流で合流する大分川に挟まれた、比較的広い低地平野になっている。標高は約18mで、霊山とは約580m、雄城台とは約50mの比高差を有する。

II. 歴史的環境

周辺地域で、旧石器時代から縄文時代晩期にかけての顕著な遺跡は知られていない。ただ、本遺跡に隣接する雄城台遺跡（高橋信武 1987）や植田市遺跡（吉田寛 1994）で若干の縄文時代後・晩期の土器・石器が採集されている。また、山伏田遺跡（江田豊 1999）で縄文時代後期中葉～晩期後葉の包含層が、植田市遺跡で縄文時代晩期末の下黒野式期の包含層・埋壺が検出されている。更に近接の玉沢地区条里跡第2次調査（後藤・荻 2002）で、縄文時代後・晩期の包含層及び焼土坑が検出され、また昨年度から本年度にかけて調査中の玉沢地区条里跡第3次調査でも、縄文時代後・晩期の石器が出土しており、大分川と七瀬川に挟まれた沖積低地に、少なくとも後期段階までに縄文人の居住があったと考えられる。沖積低地という遺跡立地は、当地域での水稲耕作の伝播時期などの問題と絡み興味深いがい、農耕に関連する遺物や遺構はまだ発見されていない。

弥生時代に入ると、先ず特筆されるのは雄城台遺跡である。沖積低地との比高差約50mの丘陵上に立地する弥生前期末から後期末までの重複遺跡で、弥生時代における当地域の拠点集落と考えられ



第1図 玉沢地区条里跡遺跡群の位置①



第2図 玉沢地区条里跡遺跡群の位置②

る。一方、沖積低地でも、弥生時代前期には山伏田遺跡で溝状遺構が、中期には深町遺跡（綿貫俊一 1993）で溝状遺構が、玉沢地区条里跡第2次調査では中期から後期に至る水田と溝状遺構そして墓域が検出されており、後期になるとグランジ遺跡（綿貫 1997）で住居跡が1基のみ検出されている。また、本遺跡でも弥生時代中期から後期に至る数条の溝が認められる。

弥生時代後期末までに雄城台は廃絶され、その後の集落立地の中心は丘陵上から沖積低地上に移るよう
で、稲田条里遺跡（小柳和宏 1997）で古墳時代前期の住居跡や溝状遺構が検出されており、古墳時代
中期～後期では稲田市遺跡でも大規模な集落が見られ、後期では六反田遺跡でも住居跡が見つかる。また、玉沢地区条里跡第2次調査では前代に引き続いて古墳全時期に及ぶ溝状遺構が検出されており、第
3次調査では2基の住居跡及び小區画水田が発見されている。本遺跡でも、2条の溝状遺構が検出されてい
る。

また古墳時代中期になると、大分市木ノ上・田原付近の丘陵上に古墳が築造されるようになる。それら
の古墳群の中でも盟主的なものとしては、全長75m以上を測る大分市大字木ノ上字原に所在する御陵古
墳（賀川光夫他 1972）が考えられる。同時期の5世紀代の古墳としては、下ヶ迫古墳（渋谷忠章
1985）・世利門古墳（賀川 1958）・山伏古墳群・浅草神社古墳群などが挙げられる。一方、5世紀後
半には初瀬期の横穴墓も出現しているようで、雄城台から南西に延びる狭い丘陵上に位置する高来山横穴
墓群（杉崎重臣 1964）では、珠文鏡を出土している。古墳時代後期になると、沖積平野を取り囲む丘
陵斜面や崖面に横穴墓が多数造営されるようになる。古代における当地域の様相は、考古学的には殆ど判
っていない。稲田市遺跡で奈良～平安期の条里に沿う溝状遺構が、六反田遺跡でも時期不明の条里に沿う
溝状遺構が検出されているが、条里水田との関係は判然としない。また、玉沢地区条里跡第2次調査でも
中世の条里水田の直下から、条里に沿った畦畔及び溝状遺構が検出されたが、ごく部分的で、またその



第3図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	期	番号	遺跡名	期
1	玉沢地区条里跡第1次	弥生～古	28	雄略御穴墓群	古墳
2	同上 六反田地区	古墳	29	六反田古墳	古墳
3	同上 山伏田地区	縄文～弥	30	下迫古墳	古墳
4	同上 二反田地区	縄文	31	浅草神社古墳	古墳
5	御陵古墳群	古墳	32	高来山横穴墓群	古墳
6	御陵中丘遺跡	縄文～弥	33	雄略古墳	古墳
7	雄略古墳	古墳	34	世利門古墳	古墳
8	御陵古墳群第2次	弥生	35	大野平古墳	古墳
9	御陵古墳群第3次	中～近世	36	稲田古墳	古墳
10	稲田市遺跡	縄文～近	37	山伏古墳群	古墳
11	グランジ遺跡	弥生～古	38	高来山横穴墓群	古墳
12	御陵遺跡	近世	39	木ノ上御穴墓群	古墳
13	北ノ池遺跡	弥生～中	40	上野御穴墓群	古墳
14	乙訓川遺跡	近世	41	木ノ上古墳群	古墳
15	雄略古墳群	縄文～弥	42	御陵古墳	古墳
16	雄略古墳群第2次	古墳	43	千人塚	古墳
17	下迫地区古墳群	中世	44	浅草神社古墳群	古墳
18	雄略御穴墓群	古墳	45	浅草神社古墳群	古墳
19	雄略御穴墓群	中世	46	11ヶ所御穴	横穴墓
20	雄略御穴	縄文～弥	47	玉沢地区条里跡	古墳
21	雄略御穴墓群	古墳	48	田原地区	古墳
22	小野御穴墓群	古墳	49	玉沢地区条里跡第1次	古墳
23	雄略御穴墓群	弥生	50	玉沢地区条里跡第2次	古墳
24	雄略御穴墓群	古墳	51	玉沢地区条里跡第3次	古墳
25	大野平古墳	古墳	52	玉沢地区条里跡第4次	古墳
26	大野平古墳	古墳	53	玉沢地区条里跡第5次	古墳
27	大野平古墳	古墳	54	玉沢地区条里跡第6次	古墳

時期も判然としなない。唯一、玉沢地区条里跡第3次調査では9世紀代の条里に開いた水田及び溝状遺構が検出されており、中世以前の古代の時期に条里水田が形成されていた可能性は高く、中世以降の条里水田と同様の方向性をもっていたと考えられるが、条里水田の開始時期、その構造などははっきりせず、第3次調査の報告が待たれる。文献では、和名抄に「植田郷」という名が見られる程度である。

中世では、「植田荘」の名称が保元2(1157)年の「太政官符案」に見られる。即ち、保元の乱で敗死した藤原頼長を没官し、後白河天皇の後院領とした中に「植田荘」(「植田荘」と誤記)が認められ、中世以降、この地が「植田荘」と呼ばれる荘園であったことが判る。また、大神系図によると、平安末以降、後に「植田氏」を名乗る大神氏が荘官となり実質的に支配したが、次第に豊後守護の友友氏の勢力下に組み入れられていったようである。その「植田荘」であるが、重国名・千歳名・松武名・行弘名・福重名・光吉名・上義名・乙犬名・永富名・吉藤名の10の名から成っていたことが、弘安8(1285)年の園田帳から判っている。佐藤満洋の復原案(佐藤 1978)によると、本遺跡の周辺は「植田荘千歳名」に属する。玉沢地区条里跡第2次調査で検出された条里水田の造成時期が12世紀後半～13世紀前半と考えられることから、大神氏の植田荘への進出時期と重なっており、関連が予想される。

近世に入ると、当地域は豊後杵杵藩領に属したが、17世紀後半から18世紀前半にかけて条里水田が造成し直され、更に明治以後、今回の開発によって失われるまで、中世の条里水田とはほぼ同位置に水田が経営されてきたことが、玉沢地区条里跡第2次調査や本遺跡の成果として判ってきている。

参考・引用文献

- 賀川 光夫 1958 「五遺跡以上合葬の一例」『考古学雑誌』第44巻 第1号
賀川 光夫・小田富士雄 1972 「御陵古墳緊急発掘調査」大分県教育委員会
江田 豊 1999 「玉沢地区条里跡遺跡群」大分県教育委員会
後藤 典幸・荻 幸二 2002 「玉沢地区条里跡第2次発掘調査報告書」大分市教育委員会
小柳 和宏 1998 「第7章 まとめ」『ガランジ遺跡 植田市遺跡 植田条里遺跡』大分県教育委員会
小柳 和宏 1998 「第6章 植田条里遺跡の調査」『ガランジ遺跡 植田市遺跡 植田条里遺跡』大分県教育委員会
渋谷 忠孝 1985 「大分地方の古墳」『えとのす29 豊(大分)の考古学』新日本教育図書
杉崎 重臣 1964 「木ノ上・高来山ノ横穴古墳」『大分県地方史』第32・33号
高橋 信武 1987 「雄城台―第8次調査の概要―」大分県教育委員会
吉田 寛 1994 「植田市遺跡 七瀬川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘報告書」大分県教育委員会
吉田 寛 1997 「第5章 植田市遺跡の調査」『ガランジ遺跡 植田市遺跡 植田条里遺跡』大分県教育委員会
綿貫 俊一 1983 「深町遺跡報告書」大分県教育委員会
綿貫 俊一 1997 「第4章 ガランジ遺跡の調査」『ガランジ遺跡 植田市遺跡 植田条里遺跡』大分県教育委員会

第3章 調査の成果

I 遺構（第4図）

調査区内で溝状遺構12条、水田遺構1面、柱穴5基を検出した。溝状遺構のうち第10・16号溝状遺構を除く10条は南西から北東方向に延びている。第5号溝状遺構の北側で5基の柱穴を確認したが¹、規模や位置に関連性はみられず、遺物も出土していないため、時期も不明である。以下当調査区の主要遺構である溝状遺構と水田遺構について概観する。

1. 溝状遺構

第2号溝状遺構（第5図）

南西から東に延びる溝状遺構で長さ約18m、最大幅約0.95m、深さ約0.55m、溝状遺構両端の底部比高差は4cmで、流水方向は南西から東と推定される。後に述べる第4・7・10号溝状遺構と第2号溝状遺構とで水田の給排水を行っていたものと考えられ、第2号溝状遺構の規模は他溝を上回っており、給排水の主たる役割を担っていたと思われる。丹で彩色された土器片をはじめ、10点を超える弥生土器片が出土しており、その中でも波状紋を伴う複合口縁壺の口縁部片が覆土下層から出土していることから、当溝の使用時期は、弥生時代後期中葉と考えられる。

西壁・中央・東壁の土層断面では、第2号溝状遺構を切るかたちで第1号溝状遺構を確認しており、幅1.32m、深さ約0.15m、底部比高差は18cmで、流水方向は西壁から東壁方向と推測される。また、6世紀前半の須恵器の蓋片、坏片が出土しているため、第2号溝状遺構と時期差はあるものの土層断面の状況から第1号溝状遺構は第2号溝状遺構を踏襲するように存在していたと考えられる。

第4・7号溝状遺構（第6図）

両溝とも第2号溝状遺構の中央に取り付いており、第4号溝状遺構は第10号溝状遺構に切られ、長さ約11m、最大幅約0.6m、深さ6cmで、第2号溝状遺構の中央部分の南から北に1mほど向かった後、直角に曲り、北東方向に延びる。第7号溝状遺構は長さ約5.8m、最大幅約0.60m、深さ12cmで、第4号溝状遺構に切られ、南から北東方向に延びる。第4号溝内の東側部分では杭跡と考えられる小穴を多く検出している。第4号溝状遺構では馬か牛と推測される獣骨が第2号溝状遺構との取り付け部付近で出土しており、第7号溝状遺構では土器片が出土している。両溝は溝の深さが前者6cm、後者12cmと浅く、第2号溝との溝の比高差も鑑みると水田からの排水を行っていたと思われ、第2号溝に付属するものと考えられる。

第5号溝状遺構（第7図）

調査区南端に位置し、南西から北東に延びる溝状遺構で長さ約8m、最大幅約1.20m、深さ約0.20m、溝状遺構両端の底部比高差は14cmで、流水方向は南から東と推定される。溝の覆土から古墳時代初頭後半の壺の口縁部片が出土しており、溝も当該時期のものと思われる。

南壁の土層断面で、第5号溝状遺構直上の水田の更に上に幅約2.20m、深さ約0.15mの第6号溝状遺構を確認している。遺物は出土していない。

第8・9号溝状遺構 (第8図)

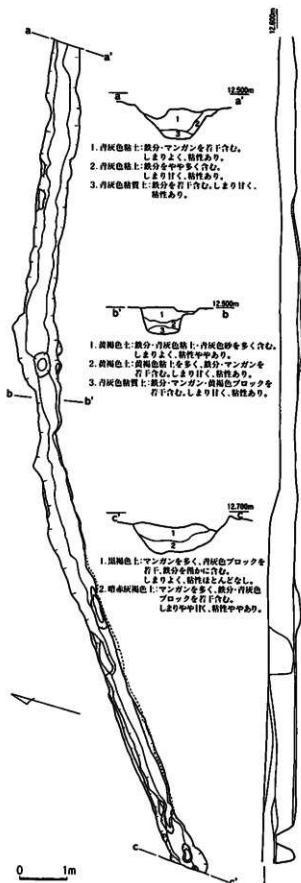
第10号溝状遺構と第4号溝状遺構に切られている第8号溝状遺構は南西から北東方向に延び、長さ約22m、最大幅約0.90m、深さ約0.25mを測る。第4号溝状遺構と第8号溝状遺構に切られている第9号溝状遺構は、第8号溝状遺構の西端部分の北にその一部を現し、約1.4m北東にいったところで、再び第8号溝状遺構の北に現れる。そして、第4号溝状遺構に切られる中央部付近で第8号溝状遺構の南に現れ、その東約6.4mの間で第8号溝状遺構に完全に切られた後、第8号溝状遺構の南に姿を現し分岐するというように、第8号溝状遺構と複雑に交差している。長さは第8号溝状遺構に切られているところも含め推定約21m、最大幅約0.55m、深さ8cmを測る。第8号溝状遺構の南西端と北東端の底部比高差は30cm、第9号溝状遺構は13cmで、両溝とも流水方向は南西から北東方向と推測される。第9号溝状遺構からの出土遺物はなく、第8号溝状遺構では弥生土器片が3点出土している。

第10号溝状遺構 (第9図)

南東から北西に延び、長さ約5m、最大幅約1.10m、深さ約0.10mを測る。当溝は第4・8・9・12号溝状遺構(A・B)を切っている。凝灰岩製の割片が3点、弥生土器片も11点出土している。溝の方向、形状等から水田の取水口であったと推測され、第4・7・2号溝状遺構との位置関係や時期からして、第2号溝状遺構に伴う溝だと思われる。

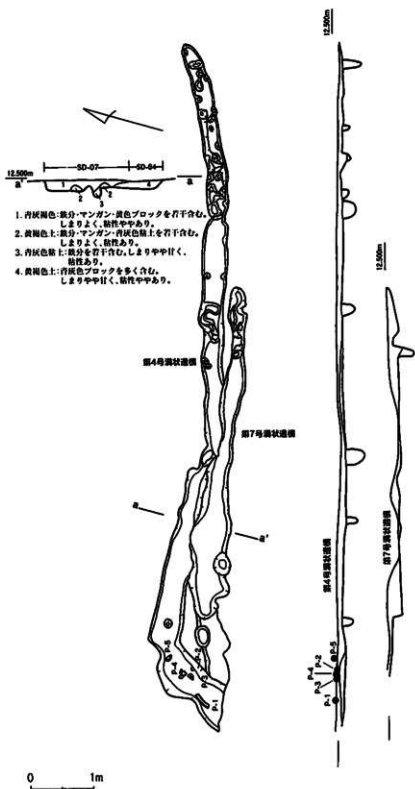
第12号溝状遺構 (第10図)

南西から中央にかけて南に膨らんで



第5図 第2号溝状遺構平面・断面図(1/80 但し土層断面図は1/40)

湾曲した後、北に膨らんで湾曲しながら北東方向に走る第12号溝状遺構は本調査区最大規模で、遺物の出土量も他溝を圧倒している。第10号溝状遺構に切られており、長さ約22m、最大幅約1.90m、深さ約0.45mで、溝北東端の底部レベルは西端よりは14cm低く、流水方向は南西から北東と推測される。b-b'、c-c'、d-d'の土層断面で2条の溝が確認され、AをBが切っていることが判り、c-c'とd-d'の間でBの両サイドでAのプランが検出されている。溝西端からb-b'にかけてAとBは重なるように走っており、土層断面の状況も含め、BはAを掘り返して構築されたものと思われる。b-b'より東ではAが南、Bが北に分岐する。また、a-a'の土層断面では、A、Bの他にAの下層にCが確認されており、当溝は改修などを受け使用されていたものと思われる。遺物は多くの弥生土器片をはじめ、石鏃、砥石、打製石斧、石皿を含む石器が27点、杭と鋤先と考えられる木器の破片2点が出土している。口縁部に流水紋を伴う弥生時代後期中葉の複合口縁壺片が出土しているが、弥生時代後期前葉と思われる壺または甕の底部片も出土しており、当溝は弥生時代後期前葉に比定されるだろう。溝の規模や改修などによる使用状況、遺物の出土量や時期を考えると当溝は長期にわたり使用されていたものと思われる。



第6図 第4・7号溝状遺構平面・断面図 (1/60但し土層断面図は1/30)

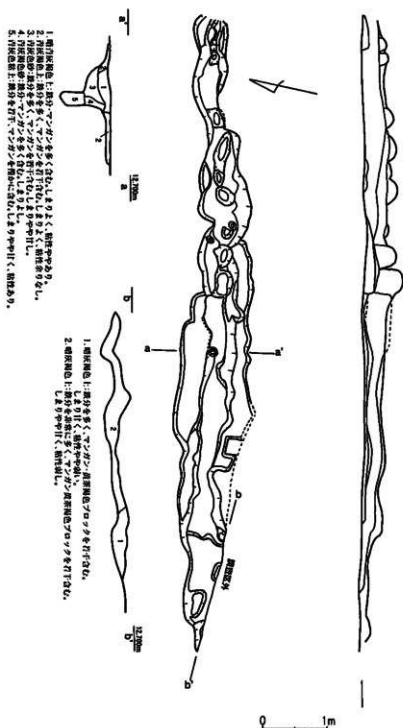
第13号溝状滑槽 (第11図)

南西から北東方向に緩やかな「S」字を描くように延びる溝状遺構で、長さ約20m、最大幅約0.80m、深さ約0.40mを測る。溝東端部分が第12号溝状遺構に切られており、西端と北東端の底部比高差は20cmで、流水方向は南西から北東方向と推測される。a-a'とb-b'土層断面の第2層下面で水の流れた痕跡である鉄分の集積がみられ、溝の中に土が堆積した後も深度の浅い状態で溝を使用したようである。凝灰岩製の剣片が2点、流木、鍬先と思われる木器の破片が2点、弥生土器片が17点出土している。弥生土器片の中に弥生時代後期前葉と思われる壺または甕の底部片が出土しており、当溝の時期に比定されるものと思われる。

第14号潜状观测 (第12回)

長さ約10m、最大幅約0.50m、深さ約0.35mで、南西から12.40mの等高線付近にかけて南に膨らんで湾曲した後、北に膨らんで湾曲しながら北東方向に延びている。当漂

は、西端底部レベルが12.06m、中央部が11.95m、北東端が11.99mと他溝と異なり溝中央部分のレベルが低いものの、流水方向は第12号・第13号同様南西から北東方向であろう。b-b'土層断面の第2層下面で水の流れた痕跡である鉄分の集積がみられ、第13号溝状遺構同様、溝の中に土が堆積した後も、



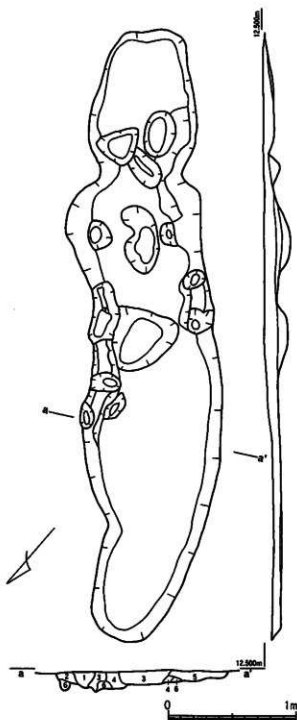
第7図 第5号溝状遺構平面・断面図 (1/60 但し土層断面図は1/30)



深度の浅い状態で溝を使用したと推測される。磁石、石鏝を含む石器が4点、流木、弥生土器片が10点以上出土しており、丹が塗られた鋤先口縁の甕の破片や弥生時代後期前葉の甕で4条の沈線のある胴部片も含まれている。当溝は出土した土器から弥生時代後期前葉の時期に比定されるものと思われる。

第15号溝状遺構（第13図）

長さ約14m、最大幅約1.10m、深さ約0.50mで、南西から北に直線的に走った後、溝中央部で北東方向に若干向きを変えて走っており、南西端と北東端の底部比高差は3cmで、流水方向は南西から北東方向と推測される。a-a' 土層断面の第2層下面で水の流れた痕跡である鉄分の集積がみられ、溝の中に土が堆積した後も深度の浅い状態で溝を使用したと推測される。石鏝、銅片を含む石器が12点、流木、体部から先端にかけて加工された木片を含む木器の破片3点が出土している。また、丹塗られた弥生土器片をはじめ、弥生中期前葉～中葉の底部片、弥生中期後葉の鋤先口縁の甕の破片も出土しており、当溝の使用時期は弥生時代中期前葉～後葉とすることが妥当であろう。最後に、第12号溝状遺構から第15号溝状遺構は溝の蛇行の仕方ほぼ同じで、平行するように走っている。

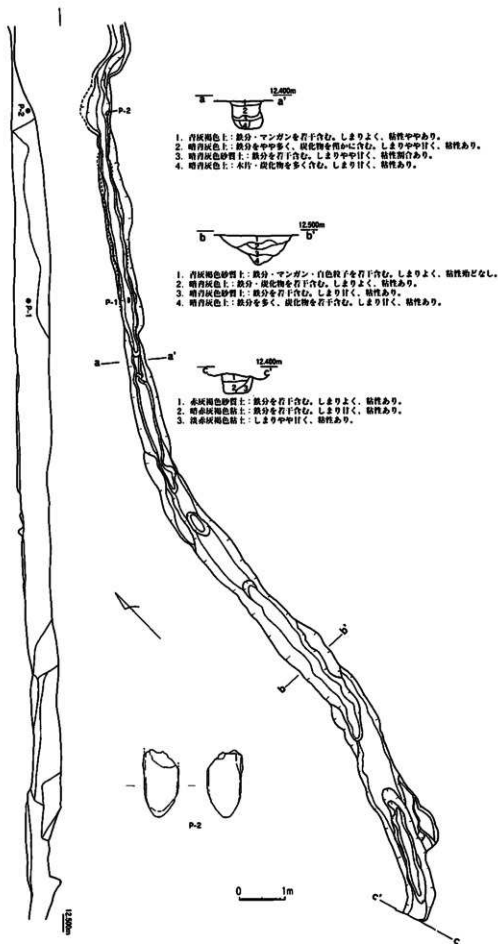


第16号溝状遺構（第14図）

北西から南方向に逆「く」字状に走る溝状遺構で、長さ約8m、最大幅約0.55m、深さ約0.10mを測る。当溝は北東端底部レベルが12.35m、南端が12.29mで、他の溝と違い流水方向は北東から南と推測される。溝全体に小穴が確認され、杭跡と思われる。溝の北西端部で第3号水田遺構に接続しており、第3号水田遺構の取水口的な機能を担っていたと推測される。弥生土器片が5点出土している。

1. 赤灰色土：鉄分・マンガン・砂粒を多く含む。しまりやや強く、粘性あり。
2. 赤灰色土：マンガン多く、鉄分を若干含む。しまりよし。
3. 赤灰色土：マンガン・鉄分を若干含む。しまりよく、粘性あり。
4. 赤灰色砂質土：鉄分多く、マンガンを若干含む。しまりやや強く、粘性あり。
5. 赤灰色砂質土：マンガンを多く含む。しまりやや強く、粘性あり。
6. 赤灰色土：鉄分を多く含む。しまり強く、粘性あり。

第10図 第10号溝状遺構平面・断面図（1/30）



第11図 第13号溝状遺構平面・断面図 (1/80 但し土層断面実測図は1/40)

2. 水田遺構

第3号水田遺構 (第15図)

調査区の西側部分に位置し、南北に長さ約11m、深さ約0.20mを測る。凝灰岩製の剣片が2点と20点を超える弥生土器片が出土している。第12号溝状遺構に切られ、第13・14・15号溝状遺構を切っているため、弥生中期中葉の土器片が出土しているが、第3号水田遺構は、第12号溝状遺構と第13号溝状遺構の切り合い関係から弥生時代後期前葉～中葉と考えられる。西壁の土層断面で確認された7基の何らかの遺構と第16号溝状遺構は、土層の状況や遺構のレベルから当水田遺構と関連があるものと思われる。

II. 遺物

須恵器や弥生土器、石器や木製品などが、溝状遺構の覆土を中心に出土している。

1. 土器 (第16図)

弥生中前期葉～古墳時代後期の土器・須恵器が出土している。

第16図 1…第1号溝状遺構東壁一括。古墳後期前半の須恵器の坏蓋。口縁部と体部との境に段がみられる。

第16図 2…第1号溝状遺構埋土一括。古墳後期前半の須恵器の坏身。

第16図 3…第2号溝状遺構 a 区下層一括。弥生後期前葉の甕で、口縁部のみ残存。

第16図 4…第2号溝状遺構 a 区下層一括。弥生後期中葉の甕の口縁部で、復原口径が約14.6cmを測る。

第16図 5…第3号水田遺構砂層一括。甕の口縁部で、波状の突帯紋が1条みられ、弥生早期段階と考えられる。

第16図 6…第5号溝状遺構 a 区一括。古墳時代初頭後半と考えられる「く」の字口縁の甕で、口縁部のみ残存。

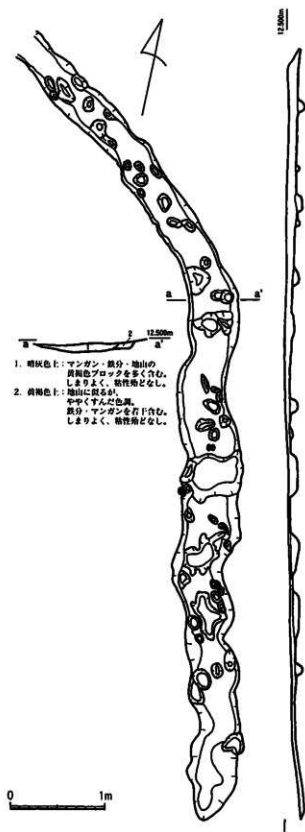
1 須恵器土器片一括。古墳後期前半の須恵器の坏蓋。口縁部と体部との境に段がみられる。
2 須恵器土器片一括。古墳後期前半の須恵器の坏身。口縁部と体部との境に段がみられる。
3 弥生後期前葉の甕で、口縁部のみ残存。
4 弥生後期中葉の甕の口縁部で、復原口径が約14.6cmを測る。
5 弥生早期段階の甕の口縁部で、波状の突帯紋が1条みられる。
6 弥生初頭後半の「く」の字口縁の甕で、口縁部のみ残存。



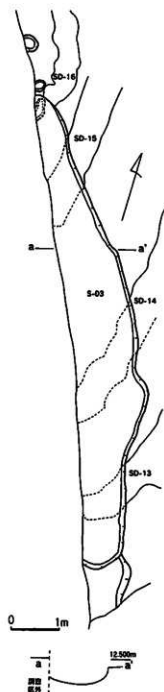
1 須恵器土器片一括。古墳後期前半の須恵器の坏蓋。口縁部と体部との境に段がみられる。
2 須恵器土器片一括。古墳後期前半の須恵器の坏身。口縁部と体部との境に段がみられる。
3 弥生後期前葉の甕で、口縁部のみ残存。
4 弥生後期中葉の甕の口縁部で、復原口径が約14.6cmを測る。
5 弥生早期段階の甕の口縁部で、波状の突帯紋が1条みられる。
6 弥生初頭後半の「く」の字口縁の甕で、口縁部のみ残存。

0 1m

第13図 第15号溝状遺構平面・断面図 (1/60但し土層断面図は1/30)



第14図 第16号溝状遺構平面・断面図 (1/40但し土層断面図は1/30)



第15図 第3号水田遺構平面・断面図
(1/80 但し土層断面図は1/40)

第16図7…第12号溝状遺構a区一括。弥生後期中葉の壺の口縁部で、刺突文が施されている。

第16図8…第12号溝状遺構b区一括。弥生後期中葉の複合口縁壺で、櫛描波状文が施文されている。

第16図9…第12号溝状遺構b区一括。弥生後期中葉の複合口縁壺で、口縁部のみ残存。

第16図10…第12号溝状遺構b区一括。弥生後期中葉の複合口縁壺で、口縁部のみ。

第16図11…第14号溝状遺構3。壺の胴部で、4本の沈線が施されている。

第16図12…第15号溝状遺構a区一括。弥生中期後葉の壺の口縁部で、復原口径16.2cmを測る。

第16図13…第12号溝状遺構3。弥生中期後葉の平底の甕で、底部のみ。

第16図14…第2号溝状遺構a区一括。弥生後期前葉の脚付甕の底部。脚部のみ残存で、復原口径14.6cmを測る。

第16図15…第12号溝状遺構b区一括。弥生中期後葉の甕の底部で、若干上げ底。

第16図16…第13号溝状遺構a区一括。弥生後期前葉の小型の甕の底部で、底径2.6cmを測る。

第16図17…第15号溝状遺構a区一括。弥生中期中葉の甕の底部で、平底を呈している。

2. 石器 (第17・18・19図)

溝状遺構やその周辺の水田層から、打製石斧や石鏃、砥石や敲石、石核などが出土している。

第17図1

第14号溝状遺構一括。安山岩製の石鏃。先端は裏から表への折れによる欠損。表面中央の刺離は折れの衝撃によるもの。裏面には大きく素材の面が残る。長三角形を呈するものと考えられる。

第17図2

第12号溝状遺構b一括。ガラス質安山岩製の二次加工を有する剝片。裏面の右側縁に鋸歯状の二次加工。末端は表面から裏面への折れによる欠損。上端に打面残存。

第17図3

第12号溝状遺構b一括。破損が著しいが、結晶片岩製の打製石斧と考えられる。下端の周縁加工が見られる部分以外の上端・右側・左側は折れによって欠損している。残る下端は、石斧の刃部や基部ではなく側縁と推察される。裏面には平坦加工が認められる。

第17図4

第12号溝状遺構5。安山岩製の石核。最終作業面の表面の上半には上方及び左側からの剝離面が見られ、古い作業面である表面下半には左側及び右側からの剝離が看取される。また、やはり表面上半の剝離に切られる裏面には、上方・下方・右側・左側からの剝離面が認められる。比較的浅い剝離角からしても、表裏面に求心状の剝片剝離を行なう石核と考えられる。

第18図1

第12号溝状遺構a一括。角閃石安山岩製の敲石。棒状の自然礫で、下端に敲きによる潰れ痕が認められる。

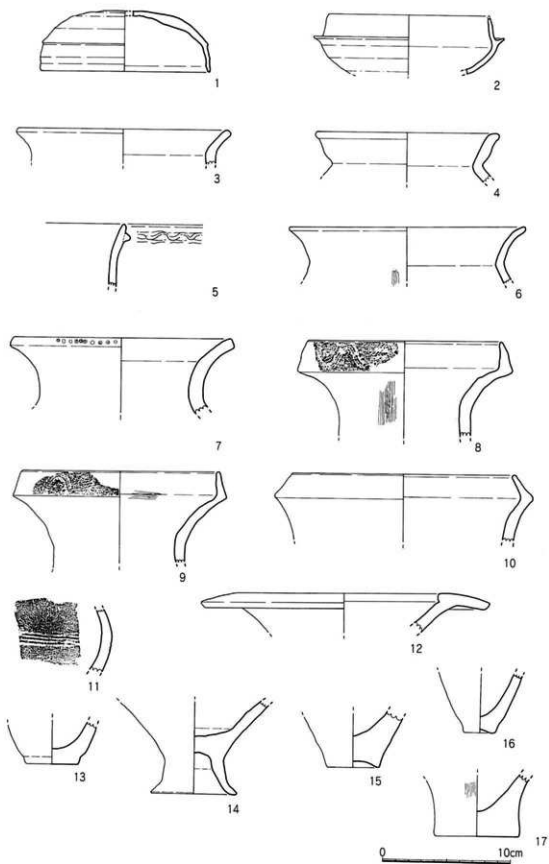
第18図2

第14号溝状遺構a一括。角閃石安山岩製の敲石。棒状の自然礫で、下端に敲きによる潰れ痕が認められる。

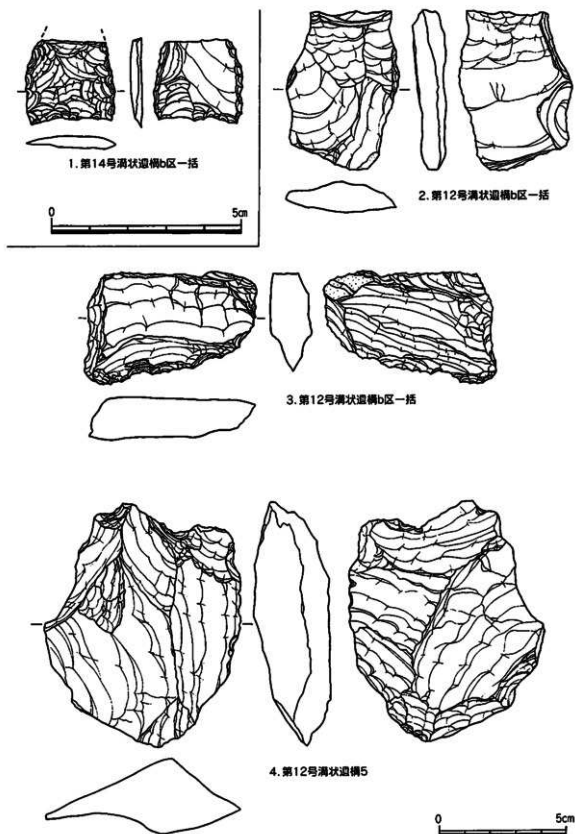
第18図3

第14号溝状遺構1。凝灰岩製の砥石。表面には顕著な線条痕、裏面には中央が浅く窪むような擦り面が見られる。金属器ないしは薄い石器を、表面では縦向きに、裏面では横向きに磨いたものと推測される。

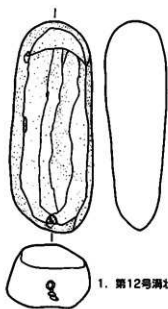
第18図4



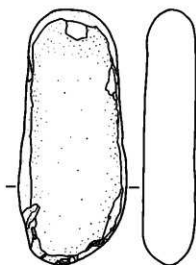
第16図 出土遺物実測図 (1/3)



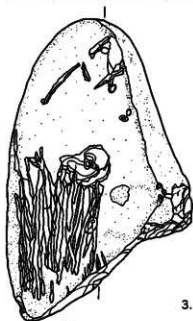
第17図 出土石器実測図1 (2/3 但し1は1/1)



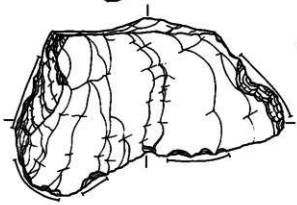
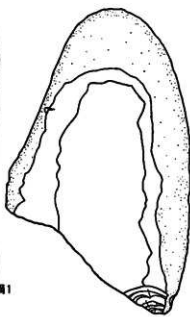
1. 第12号溝状道標a区一括



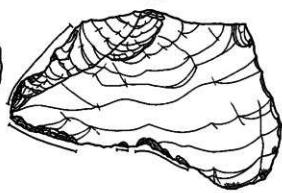
2. 第14号溝状道標a区一括



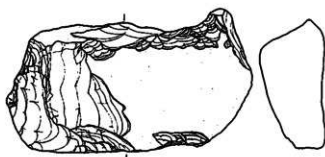
3. 第14号溝状道標1



4. 第12号溝状道標c区一括

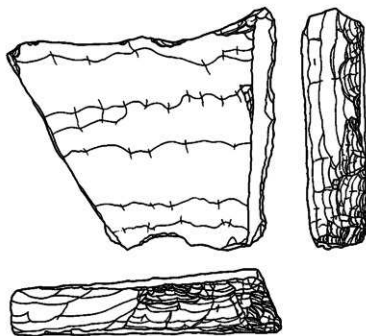


第18圖 出土石器実測圖2 (1・2は2/3、3・4は1/2)



1. 第15号溝状遺構3

0 5cm



2. 第15号溝状遺構4

0 5cm

第19図 出土石器実測図3 (1は1/2、但し2は2/3)

第12号溝状遺構c一括。安山岩製の使用痕を有する剥片。第17図4の石核に近い石材の大形剥片で、表面の左側縁全体、下端に部分的に、右側縁下半、裏面の左側縁全体、下端に部分的に、使用痕が認められる。

第19図1

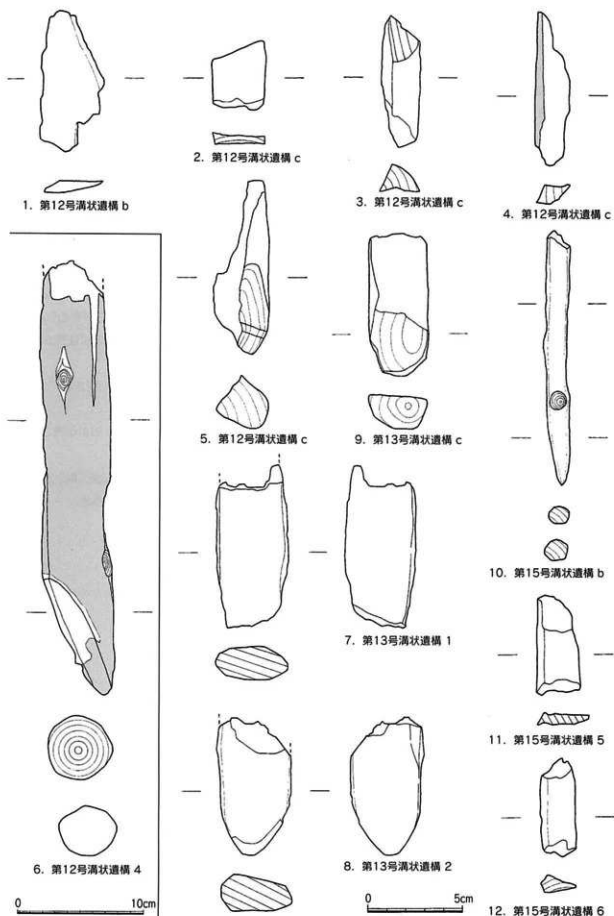
第15号溝状遺構3。凝灰岩の大形の自然礫の周縁に整形加工を有する石器。表面の下端右側、裏面の下端中央部に見られる抉り状の加工から、石錘の一種と考えられ、玉沢地区条里跡第2次調査の第Ⅱ・Ⅲ調査区でも、同様の遺物が出土している。

第19図2

第15号溝状遺構4。安山岩製の石核。扁平な板状の分割礫を素材とし、平坦な分割面を打面とし、正面のみを作業面としている。剥がされた剥片の大きさからすると、同石材の第17図1のような石錘の素材が剥離されたと推察される。右側縁全体には剥片剥離とは考えられない剥離痕が認められるが、石核として使用後、刃部を作出し、礫器状の石器として用いた可能性がある。

3. 木製品 (第20図)

12～15号溝状遺構の底辺の泥炭層を中心に、多数の流木と共に若干の木製品が出土している。



第20図 出土木製品実測図 (1/2 但し6は1/3)

- 第20図1…第12号溝状遺構b区一括。長さ7.4cm、幅3.1cm。全体に破損が著しく用途については不明である。形態より鋤先の可能性あり。
- 第20図2…第12号溝状遺構c区一括。長さ3.6cm、幅2.8cm。木片である可能性が高い。
- 第20図3…第12号溝状遺構c区一括。上端部分は工具による加工が施される。長さ6.9cm、幅2.0cmを測る。
- 第20図4…第12号溝状遺構c区一括。左側縁のみ遺存している。用途については不明。長さ8.0cm、幅1.7cm。
- 第20図5…第12号溝状遺構c区一括。右側以外は破損により欠損。用途は不明である。長さ9.1cm、幅2.9cm。
- 第20図6…第12号溝状遺構4。先端は鋭利な工具によって加工がなされている。また、全体に炭化している。上端は割れによる欠損。長さ34cm、幅5.3cmを測る。
- 第20図7…第13号溝状遺構1。上端は欠損しているため、全容については不明である。先端は鋭利なもので加工が施された痕跡が認められ、丁寧な面取りがなされている。農具の可能性が考えられる。
- 第20図8…第13号溝状遺構2。用途については加工状態や大きさなどから7と同様に農具の可能性が考えられる。上端は割れにより欠損している。長さ7.0cm、幅3.9cm。
- 第20図9…第13号溝状遺構c区一括。右上端は破損している。下端は工具による加工が施されている。用途については不明である。
- 第20図10…第15号溝状遺構b区一括。上端は割れによる欠損。残存部分は全面に入念な加工が施されている。長さ13.4cm、幅1.2cmを測る。
- 第20図11…第15号溝状遺構5。右側以外は割れにより破損している。用途不明品。長さ5.2cm、幅2.2cm。
- 第20図12…第5号溝状遺構6。破損が著しく用途については不明である。長さ5.1cm、幅1.8cm。

Ⅲ. 各時期の水田層の復原の予察

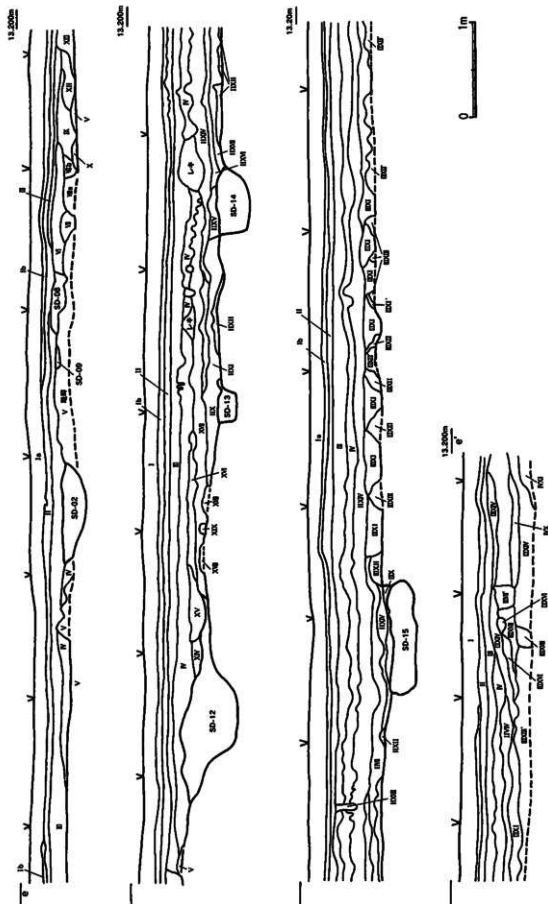
本遺跡では、時間的な制約上、第3号水田遺構以外の水田の面的な検出が行えなかったため、土層断面の観察と溝状遺構から出土した遺物などから水田復原の予察を行う。

1. 現代・近世の水田層（第21・22図）

どの断面図にも共通するのがⅠ・Ⅱ層である。Ⅰ層は現代の水田層で、一部北西部の土層の厚い箇所では明確な床土層であるⅠb層も認められる。Ⅱ層は近世の水田層と考えられ、やはり北西部の土層の厚い箇所などでは、明確な床土であるⅡ'層も認められる。両層ともに条里に乗っており、調査区全体を覆うだけでなく、全方位的に調査区の外側に延びている。

2. 古墳時代の水田層（第21・22図）

やはり、どの断面図にも共通するのが、Ⅰ・Ⅱ層直下のⅢ層及びⅢa・b層の水田層で、ほぼ全調査区を覆っており、a・b層に分離している場合は、a層が耕作土でb層は床土層である。調査は行っていないが、土層断面で確認された第1・6号溝状遺構に伴う水田層である。第1号溝状遺構から出土している須恵器の蓋や坏から、古墳時代後期の所産だと考えられるが、一枚下の水田層との関係から、古墳時代前期



第22图 調查区西壁土層断面圖 (1/40)

対応する第2号溝状遺構から出土した遺物から、弥生時代後期中葉の時期が想定されるが、次期の2の水田の時期から鑑みると、弥生末～古墳初頭までの時間幅を持つ可能性が高い。土層断面図から想定される床土面の標高は12.50m前後で、水田区域は調査区の北東側で、面的には調査区の半ば以上を占める。北東側は更に低くなっていることから、水田は北東方面の調査区外側に延びていると考えられる。またd-d'でも水田層が見られ、西壁付近の頂部に平面やa-a'の看取される畦畔の存在から、北東側の水田と共に頂部の畦畔を挟んで西側に延びる水田も想定される。

4. 弥生中期前葉～後期前葉の水田層（第21・22図）

c-c'のⅦ～Ⅸ層、d-d'のⅦ・Ⅷ層に相応する水田層で、第8・9号溝状遺構の辺りから北の第15号溝状遺構のやや西側の間に見られる。上層が耕作土で、下層が床土層となっている。土層断面図から想定される床土面の標高は12.20～30m前後で、調査区の北東部で面的に約1/4を占めるだけであるが、2・3号同様北東方面に調査区の外側に延びていくと推察される。この水田区域の範囲に入る第8・9、12、13、14・15号溝状遺構が水路として対応すると考えられる。それらの溝から出土した遺物からすると、弥生中期前葉から後期前葉の時期が想定されるが、約200年の間に5条の溝が変遷していることになる。しかし、隣接する第2次調査の成果からすると、水田が中期前葉にまで遡るかどうかは疑問である。一方、第3号水田遺構も床土面の標高は12.30m前後で、また第12号溝状遺構より旧く、第13・14・15号溝状遺構を切っていることから、ほぼ同時期の水田と考えられる。従って、北東の水田と第3号水田遺構は、間に頂部の畦畔を挟んで併存していたと考えられ、畦畔部を頂部として東西に傾斜してゆく地形が想定復原される。頂部の畦畔は、平面的にも確認されており、断面でもd-d'のⅦ・Ⅷ層に看取される。

5. 小結

本調査区では、現代のものを含め、合せて5枚ないし6枚（最も窪んでいる北東部のみ）の水田面が検出された。1の現代と近世の水田と、2・3・4の古墳時代以前の水田の間には時間的にかなりの断絶が認められる。これが、古墳時代以前の窪地に形成された谷水田の廃絶の後、古代に条里水田は本調査区近辺では造成されず、近世に新田開発されるまで放置されていたことを示すのか、それとも古代ないし中世にも水田は形成されたが、近世の水田によって削平を受けた結果、痕跡が見られないことを示唆するのかは、現状では判断が不可能である。

それで、第2次調査の成果を援用して検討したい。第2次調査第Ⅰ調査区では、本調査区の2・3・4の水田と同様の弥生中期中葉から古墳時代後期に至る溝状遺構と水田が検出されており、断面観察ではそれ以降の古代・中世と考えられる水田層も看取される。が、溝状遺構は各時期共に深さは約0.4mと本調査区の大半のものと変わらないが、幅約2mを有し、本調査区では最大の第12号でも幅約1.5mで、他は幅1m以下であるのに比して、相当に大規模である。また、水田の面積も第Ⅰ調査区全域（約5000㎡）に広がって認められており、窪地に形成された本調査区の水田面積と比べると規模が全く異なる。このことから鑑みると、古代・中世で大規模な条里水田が造成される区域は、それ以前の弥生・古墳時代でも大規模な水田が形成されていた可能性が高い。従って、本調査区のような小規模な谷水田が形成される地域では、条里水田が造成されるのは近世以降であるとも推察される。

一方、弥生時代中期から古墳時代後期にかけての当時の地形の様子から、溝の掘り込み面及び調査区の土層断面図から以下のように推測される。即ち、南東部が最も高く、北東部に向けて傾斜しており、弥生中

期から後期にかけての最も窪んでいた時期で約0.5mの標高差が認められる。同時に、西側の調査区壁から2～3mの辺りが埋せ尾根上の頂部となっており、それより西側方面にも傾斜してゆくことと推測され、埋せ尾根上の頂部の東西に水田が形成されている。弥生後期中葉以降徐々に窪地は埋没してゆき、古墳時代前期以降平坦化が促進されていったものと推察される。また、大きな地形の様相を概観すると、弥生後期から古墳時代の旧水田面の標高が、直線距離で約800m西北西に位置する第2次調査第1地点で約13.70～80m、約400m北西に位置する第II地点で約12.80m以下、約250m北西に位置する第III地点で約13.00m、本調査区で12.60～12.30mとなっており、平均して西から東に向かって100mごとに約15cmずつ傾斜しており、微地形として第2次調査第III調査区が微高地となっており、第III調査区と本調査区の間、いずれかの地点で再び傾斜に転じ、本調査区の西壁付近でごく僅かな微高地が存在し、また、北東に向かって傾斜している、ということになろう。

第2表 土器観察表

調査 区画 番号	遺物 番号	出土 遺構	出土 地区	層位	種類	器種	時期	土		色調	断面		法	量	備考
								器材	粒子		内面	外面			
16	1	第11号溝状遺構	一括	東壁	須恵器	坏蓋	古墳後期前半	2～3mmの砂粒	陶	淡灰色	ナテ	ナテ	13.4	4.8	反転覆元・ロクロ
16	2	第11号溝状遺構	一括	埋土	須恵器	坏身	古墳後期前半	1～2mmの砂粒	陶	淡灰色	ナテ	ナテ	12.6	4.7	反転覆元・ロクロ
16	3	第21号溝状遺構	a	下層	弥生土器	甕	弥生後期前葉	石灰、角四石	陶	淡茶褐色	ナテ	ナテ	16.6		反転覆元、1輪破片
16	4	第21号溝状遺構	a	下層	弥生土器	甕	弥生後期中葉	石灰、白色粒	陶	茶褐色	ナテ	ナテ	14.6		反転覆元、1輪破片
16	5	第31号水田遺構	一括	砂層	弥生土器	甕	弥生早期	石灰、白色粒	陶	茶褐色	ナテ	ナテ			11輪のみ、欠部あり
16	6	第51号溝状遺構	a	上層	弥生土器	甕	古墳前期後半	石灰、白色粒	陶	淡茶褐色	ナテ	ナテ	18.6		反転覆元、1輪のみ
16	7	第121号溝状遺構	a	弥生土器	甕	弥生後期前葉	石灰、1mm粒	陶	淡茶褐色	ナテ	ナテ	17.0			11輪のみ
16	8	第121号溝状遺構	b	弥生土器	複合11輪	弥生後期中葉	石灰、2mm粒	陶	淡茶褐色	ナテ	ハテ	15.0			11輪のみ、波状文
16	9	第121号溝状遺構	b	弥生土器	複合11輪	弥生後期中葉	白色、角四石	陶	淡茶褐色	ナテ	ナテ	15.6			11輪のみ、波状文
16	10	第121号溝状遺構	b	弥生土器	複合11輪	弥生後期中葉	石灰、白色粒	陶	茶灰褐色	ナテ	ナテ	17.6			11輪のみ、波状文
16	11	第141号溝状遺構	3	弥生土器	甕			白色粒	陶	淡灰色	ナテ	ナテ			胴部のみ
16	12	第151号溝状遺構	a	弥生土器	甕	弥生中期後葉	石灰、角四石	陶	淡茶褐色	ナテ	ナテ	16.2			11輪のみ
16	13	第121号溝状遺構	3	弥生土器	甕	弥生後期前葉	石灰、角四石	陶	茶褐色	ナテ	ナテ			4.2	底部のみ
16	14	第121号溝状遺構	a	下層	弥生土器	甕	弥生中期後葉	石灰、角四石	陶	茶褐色	ナテ	ナテ		6.8	底部のみ
16	15	第121号溝状遺構	a	弥生土器	甕	弥生後期前葉	石灰、1mm粒	陶	茶褐色	ナテ	ナテ			4.1	底部のみ
16	16	第131号溝状遺構	a	弥生土器	甕	弥生後期前葉	白色、角四石	陶	暗灰茶褐色	ナテ	ナテ			2.6	底部のみ
16	17	第151号溝状遺構	a	弥生土器	甕	弥生中期中葉	石灰、白色粒	陶	茶赤褐色	ナテ	ハテ			6.8	底部のみ1/2残り

第3表 木製品観察表

調査 区画 番号	遺物 番号	出土 遺構	出土 地区	種類	器種	法		備考
						残存長	残存幅	
21	1	第121号溝状遺構	b	炭？	縄先？	7.4	3.1	
21	2	第121号溝状遺構	c	不明	不明	3.6	2.8	
21	3	第121号溝状遺構	c	不明	不明	6.9	2.0	
21	4	第121号溝状遺構	c	不明	不明	8.0	1.7	
21	5	第121号溝状遺構	c	不明	不明	9.1	2.9	
21	6	第121号溝状遺構	4	建築材	杭	34	5.3	
21	7	第131号溝状遺構	1	炭？	不明	8.6	3.7	
21	8	第131号溝状遺構	2	炭？	不明	7.0	3.9	
21	9	第131号溝状遺構	c	不明	不明	7.4	3.1	
21	10	第151号溝状遺構	b	不明	不明	13.4	1.2	
21	11	第151号溝状遺構	5	不明	不明	5.2	2.2	
21	12	第151号溝状遺構	6	不明	不明	5.1	1.8	

第4表 石器観察表

調査 番号	出土 遺物	出土 遺物	出土 地区	種 類	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
		第3号水田遺構		銅 片	凝灰岩				15.4	
		第3号水田遺構		銅 片	凝灰岩				5.5	
		第10号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				8.0	
		第10号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				3.6	
		第10号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				3.2	
17	4	第12号溝状遺構	p-5	石 槌	安山岩	9.40	7.65	3.00	140.0	
		第12号溝状遺構	p-9	石 錘	凝灰岩	7.60	13.80	4.00	308.0	
18	1	第12号溝状遺構	al-4	銅 片	角閃石安山岩	8.05	3.25	1.90	106.0	
		第12号溝状遺構	al-4	銅 片	角閃石安山岩	4.90	12.40	1.85	128.0	
		第12号溝状遺構	al-4	二次加工銅片	凝灰岩	4.85	8.20	3.40	82.5	
		第12号溝状遺構	al-4	銅 片	凝灰岩				184.0	
		第12号溝状遺構	al-4	銅 片	ガラス質安山岩				3.2	
		第12号溝状遺構	al-4	銅 片	凝灰岩				10.2	
		第12号溝状遺構	al-4	銅 片	凝灰岩				5.7	
17	2	第12号溝状遺構	bl-4	二次加工銅片	ガラス質安山岩	6.10	4.50	1.30	30.4	
17	3	第12号溝状遺構	bl-4	打製石片	結晶片岩	65.80	4.40	1.70	677.5	下組以外欠損
		第12号溝状遺構	bl-4	石 槌	凝灰岩				770.0	
		第12号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩	7.95	8.75	1.75	90.5	
		第12号溝状遺構	bl-4	銅 片	ガラス質安山岩	3.80	4.95	1.35	21.6	
		第12号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				37.0	
		第12号溝状遺構	bl-4	調整銅片	凝灰岩	5.60	6.70	1.25	29.8	
		第12号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				11.4	
		第12号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				4.9	
		第12号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				65.5	
		第12号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				137.0	
		第12号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				140.0	
		第12号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				38.4	
		第12号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				110.0	
		第12号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				154.0	
		第12号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				132.0	
18	4	第12号溝状遺構	cl-4	使用痕銅片	安山岩	9.25	14.00	3.50	278.0	
		第12号溝状遺構	cl-4	銅 片	凝灰岩				132.0	
		第13号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				16.0	
		第13号溝状遺構	cl-4	銅 片	凝灰岩				47.2	
18	3	第14号溝状遺構	p-1	銅 片	凝灰岩	14.90	9.60	3.25	346.0	表裏面に磨き痕
18	2	第14号溝状遺構	al-4	銅 片	角閃石安山岩	9.95	7.30	2.10	154.0	
17	1	第14号溝状遺構	bl-4	石 槌	安山岩	12.30	2.35	3.50	2.6	先端欠損
19	1	第14号溝状遺構	cl-4	銅 片	凝灰岩				8.7	
19	2	第15号溝状遺構	p-2	二次加工銅片	凝灰岩	6.00	5.80	1.80	42.8	
		第15号溝状遺構	p-3	石 錘	凝灰岩	10.00	17.40	4.55	484.0	
		第15号溝状遺構	p-4	石 槌	安山岩	26.80	10.60	9.50	262.0	
		第15号溝状遺構	p-7	分銅	凝灰岩				364.0	
		第15号溝状遺構	al-4	銅 片	凝灰岩	7.10	5.90	2.65	84.0	
		第15号溝状遺構	al-4	銅 片	凝灰岩				28.6	
		第15号溝状遺構	al-4	銅 片	凝灰岩				364.0	
		第15号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				7.3	
		第15号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				5.4	
		第15号溝状遺構	bl-4	銅 片	結晶片岩				2.2	
		第15号溝状遺構	bl-4	銅 片	結晶片岩				2.5	
		第15号溝状遺構	bl-4	銅 片	凝灰岩				486.0	
		調査区東界		銅 片	凝灰岩				5.1	

写 真 图 版



1. 第2号溝状遺構東壁a-a'



2. 第2号溝状遺構b-b'



3. 第2号溝状遺構西壁c-c'



4. 第4号溝状遺構獸骨出土状況



5. 第4・7号溝状遺構東壁



6. 第4・7号溝状遺構a'-a



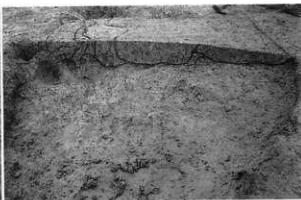
1. 第5号沟状遗槽a'-a



2. 第8号沟状遗槽a-a'



3. 第9号沟状遗槽b-b'



4. 第10号沟状遗槽a-a'



5. 第12号沟状遗槽A a-a'



6. 第12号沟状遗槽B a-a'



1. 第12号沟状遗構b-b'



2. 第12号沟状遗構c-c'



3. 第12号沟状遗構d-d'



4. 第13号沟状遗構a-a'



5. 第13号沟状遗構b-b'



6. 第13号沟状遗構c-c'



1. 第13号沟状遗構2出土状況



2. 第14号沟状遺構b-b'



3. 第14号沟状遺構c-c'



4. 第14号沟状遺構d-d'



5. 第15号沟状遺構a-a'



6. 第15号沟状遺構b-b'



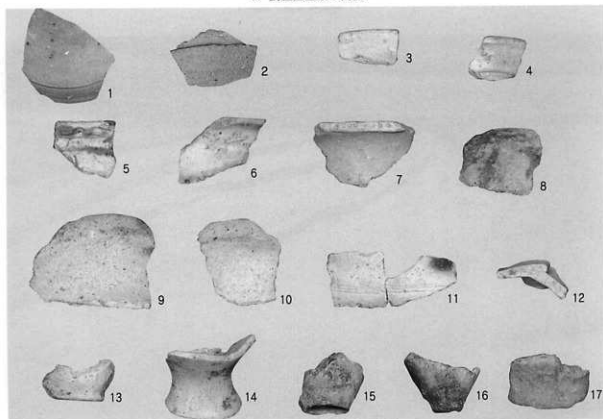
1. 調査区全景 1 北側



2. 調査区全景 2 中央

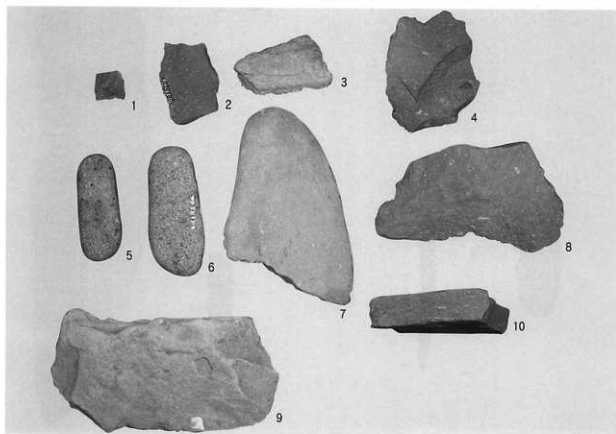
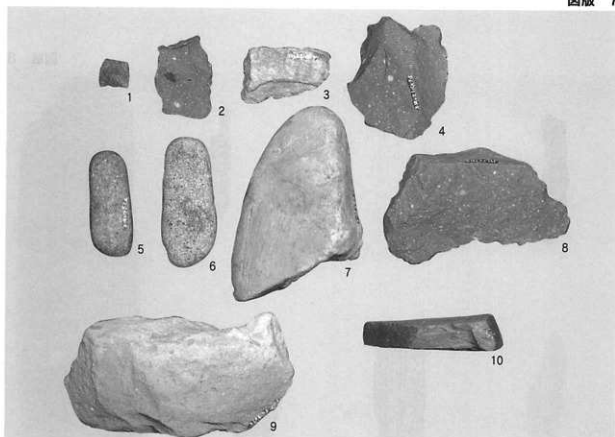


1. 調査区全景3南側



2. 玉沢地区桑里跡第6次出土土器

- | | | | | | |
|---------------|---------------|--------------|---------------|---------------|---------------|
| 1. SD-1 | 2. SD-1 | 3. SD-2a区一括 | 4. SD-2a区一括 | 5. 第3号水田遺構一括 | 6. SD-5a区一括 |
| 7. SD-12a区一括 | 8. SD-12a区一括 | 9. SD-12a区一括 | 10. SD-12a区一括 | 11. SD-14a区一括 | 12. SD-15a区一括 |
| 13. SD-12a区一括 | 14. SD-12a区一括 | 15. SD-12a区 | 16. SD-12a区一括 | 17. SD-15a区一括 | |



玉沢地区糸里跡第6次出土石器

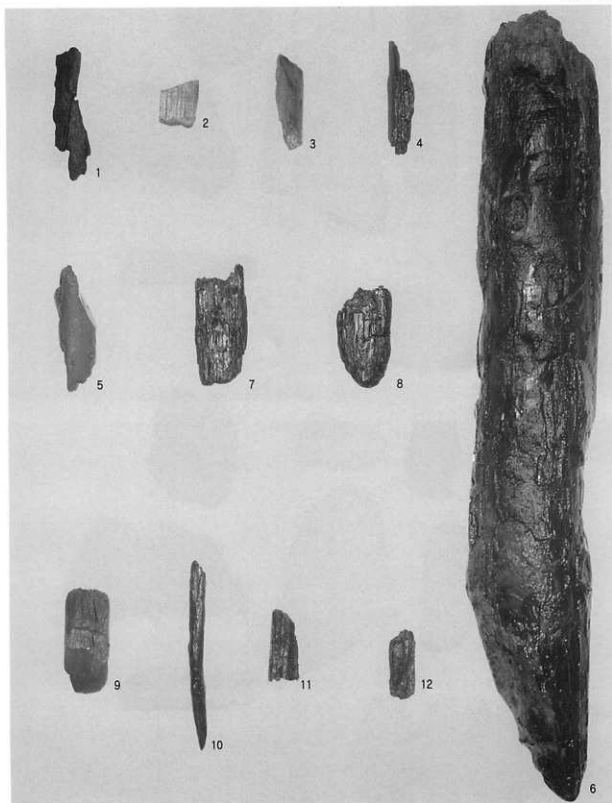
1. SD-14b区一插
6. SD-14a区一插

2. SD-12b区一插
7. SD-14-1

3. SD-12b区一插
8. SD-12c区一插

4. SD-12-5
9. SD-15-3

5. SD-12a区一插
10. SD-15-4



玉沢地区条里跡第6次出土木製品

1. SD-12b
7. SD-13-1

2. SD-12c区
8. SD-13-2

3. SD-12c区
9. SD-13c区

4. SD-12c区
10. SD-15b区

5. SD-12c区
11. SD-15-5

6. SD-12-4
12. SD-15-6

報告書抄録

ふりがな	たまざわちくじょうりあとだいろくじはつつちようさほうこくしょ							
書名	玉沢地区条里跡第6次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	萩 幸 二 井 口 あけみ							
編集機関	大分市教育委員会							
所在地	〒870-0046 大分県大分市荷揚町2丁目31号 TEL097-534-6111(代)							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たまざわちく 玉沢地区 条里跡	おおいたけんおおいち 大分県大分市 たまざわ 大字玉沢	44201	322111	33°11'30"	131°55'30"	2002.08.06 ～ 2002.09.20	496㎡	病院建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
玉沢地区 条里跡 第6次調査	水田跡	弥生～ 古墳時代		溝状遺構 水田跡	掘削 埴輪 須恵器蓋片 石鏃 石剣 瓦片 石槌 打製石斧 銀貨 銅柄 杭	南西から北東方向に流れる溝10条が、弥生 時代中期から古墳時代の間に平行するよう に変遷。		

玉沢地区条里跡

第6次発掘調査報告

～病院建設に伴う発掘調査報告書～

2003年3月31日

発 行 大分市教育委員会
大分市荷揚町2-31

印 刷 丸徳印刷株式会社
大分市新14番50号
TEL 097-558-7737
FAX 097-558-7471